2021 年 12 月館員おすすめの本

『52 ヘルツのクジラたち』（町田そのこ）

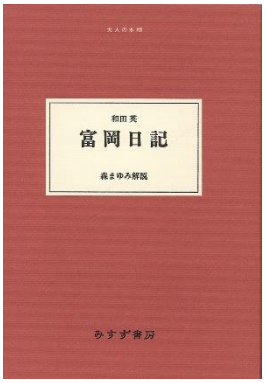
吉田　梨紗

タイトルでもある 52 ヘルツとは周波数を表し、高音すぎて他のクジラには届かない声のこと、つまり孤独なクジラのことです。辛い過去を持つ主人公の貴瑚は自身にその姿を重ね合わせています。ある日虐待により声を発することのできない少年と出会い、過去に向き合っていくストーリーです。

この小説の登場人物達はそれぞれ何かを抱えています。児童虐待、DV や LGBT 等、人には打ち明けづらい悩み、それが 52 ヘルツのクジラの声としてあげられています。辛い状況においても誰か一人でもその声を聞きとり、優しく受け止められるように願う著者の気持ちが現れている小説です。（中央公論新社）

『富岡日記』（和田英）

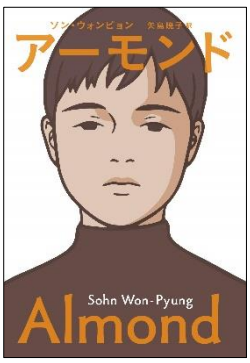
原　真由美



明治 5（1872）年、絹の輸出を志した日本政府によって最新設備と外国人技師による技術を結集した富岡製糸場が誕生し多くの工女が全国から集まりました。この日記は和田英が富岡製糸場で過ごした 2 年間を回想したものです。紡績工女といえば過酷な労働を想像しますが、意外にも楽しみや希望を持って働いていたことが記録されています。待遇の差、病気やホームシック、干物ばかりの塩辛い食事に辟易したり不満もありましたが、工場長の尾高惇忠は、お花見や盆踊り、買い物、化粧、芝居見物等できるよう余暇の自由を保障しました。フランス人技師の妻のドレスに憧れ、初めて目にするビスケットと葡萄酒を御馳走されたり、故郷へ暇乞いする際には東京見物も計らわれました。当時富岡製糸場で最高の技術を学ぶことは誇りでした。地元の製糸場に戻って指導者として活躍する姿は新時代のさきがけになろうという意気込みに満ちたものだったのでしょう。（みすず書房）

『アーモンド』（ソン・ウォンピョン）

大久保美玲



幼い頃から感情表現が乏しく、人が殴られて死にそうになっても恐怖やあせりを感じないユンジェ。MRI 検査では脳の一部である扁桃体が人よりも小さく、失感情症（アレキシサイミア）と診断されましたが、母と祖母の深い愛情により、様々な感情を頭で覚える訓練を重ねて成長し、なんとか社会生活を送っていました。しかし、17 歳の誕生日であるクリスマスイブの夜に大事件が起こり、ユンジェの人生は大きく変わってしまいます。アーモンドは扁桃体の形に似ていることから、母がユンジェに与え続け、扁桃体が大きくなるように願い続けた愛の象徴です。そんな大きな愛を受け続け、後見人であるシム博士、同級生のゴニやドラなど巡り会う人々にも恵まれたユンジェの成長に、人生の光を見ることができます。（祥伝社）